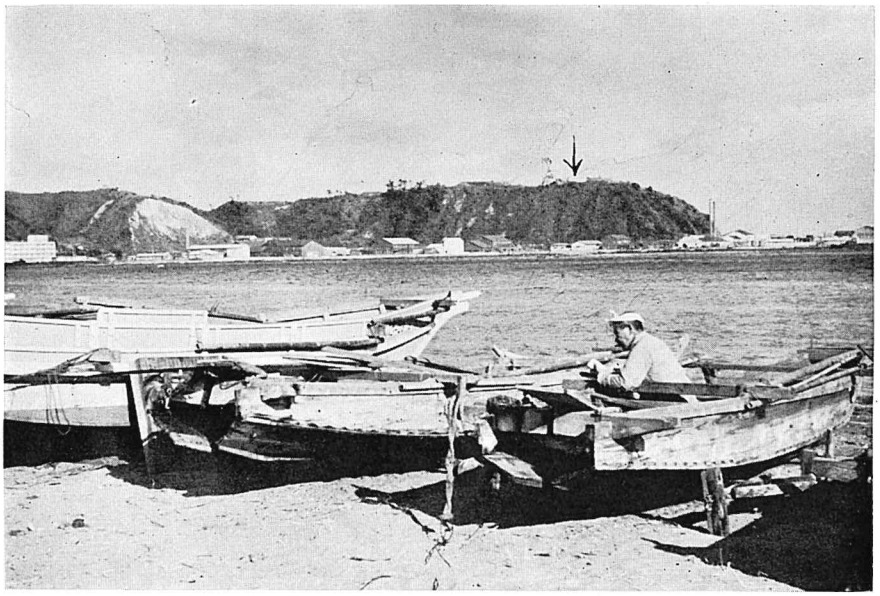
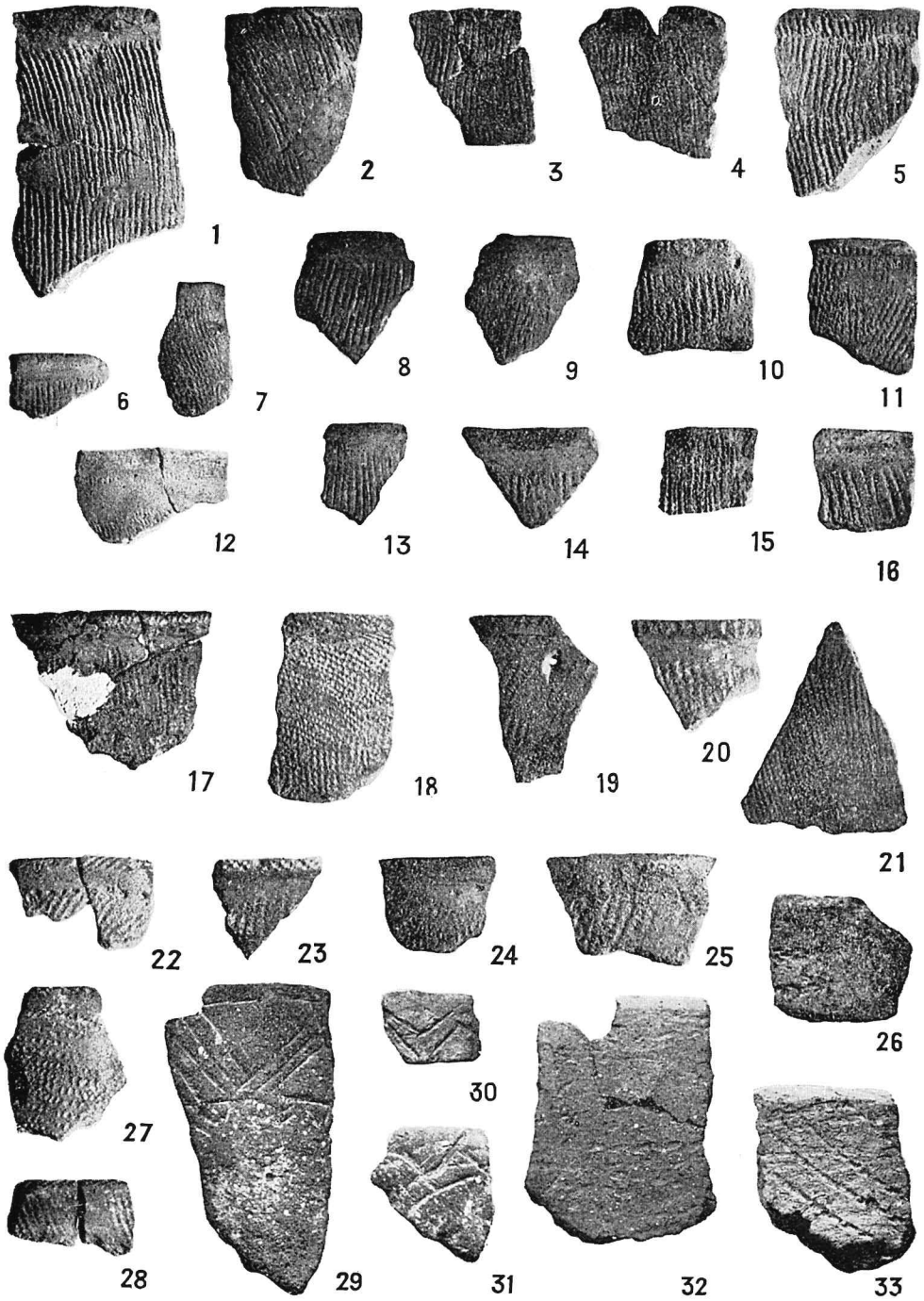
〈第一図版〉



平　根　山　遠　望（南方久里浜より）

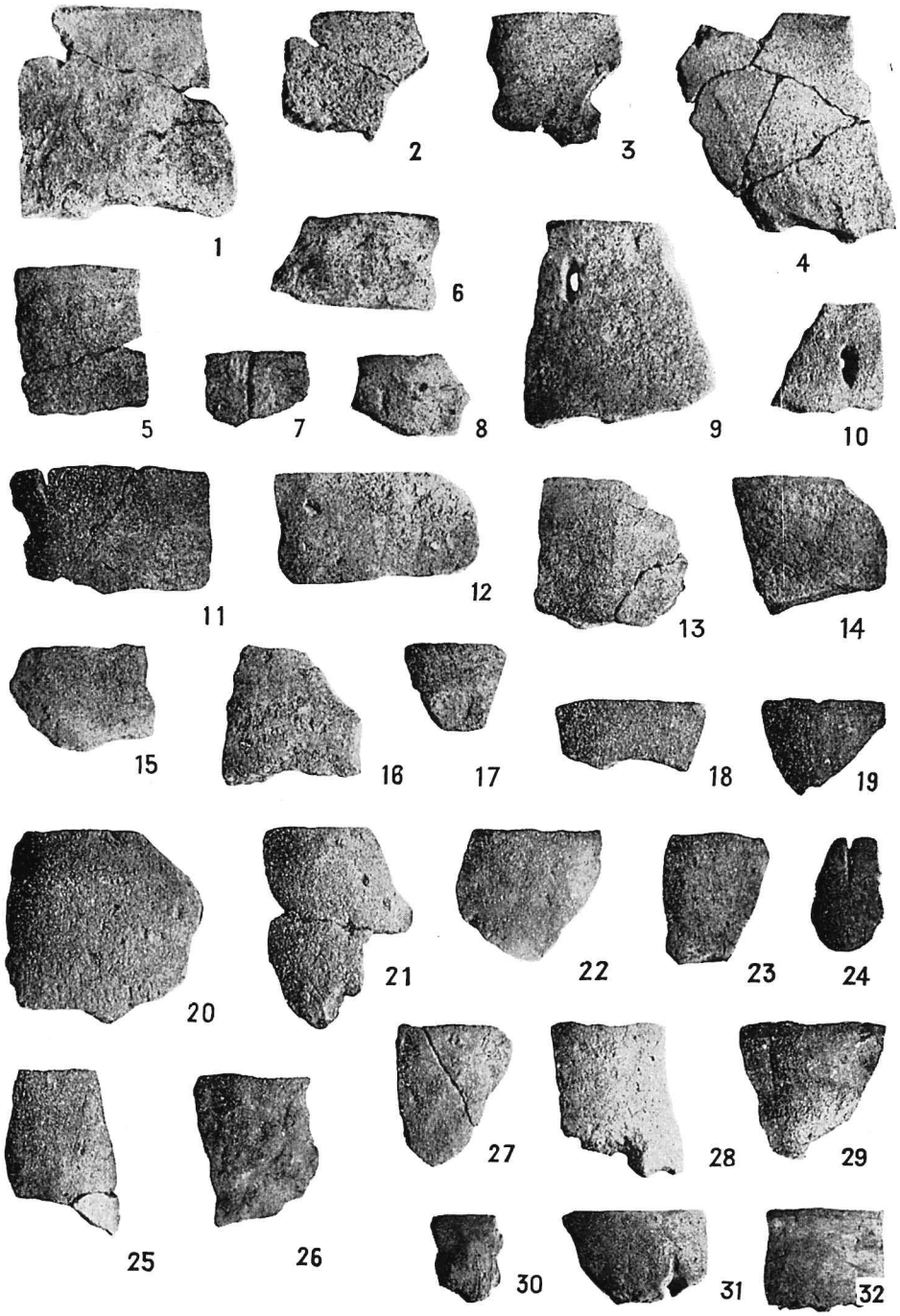
平　根　山　遺　跡（第Ⅰ・第Ⅱトレンチ）

（第二図版）



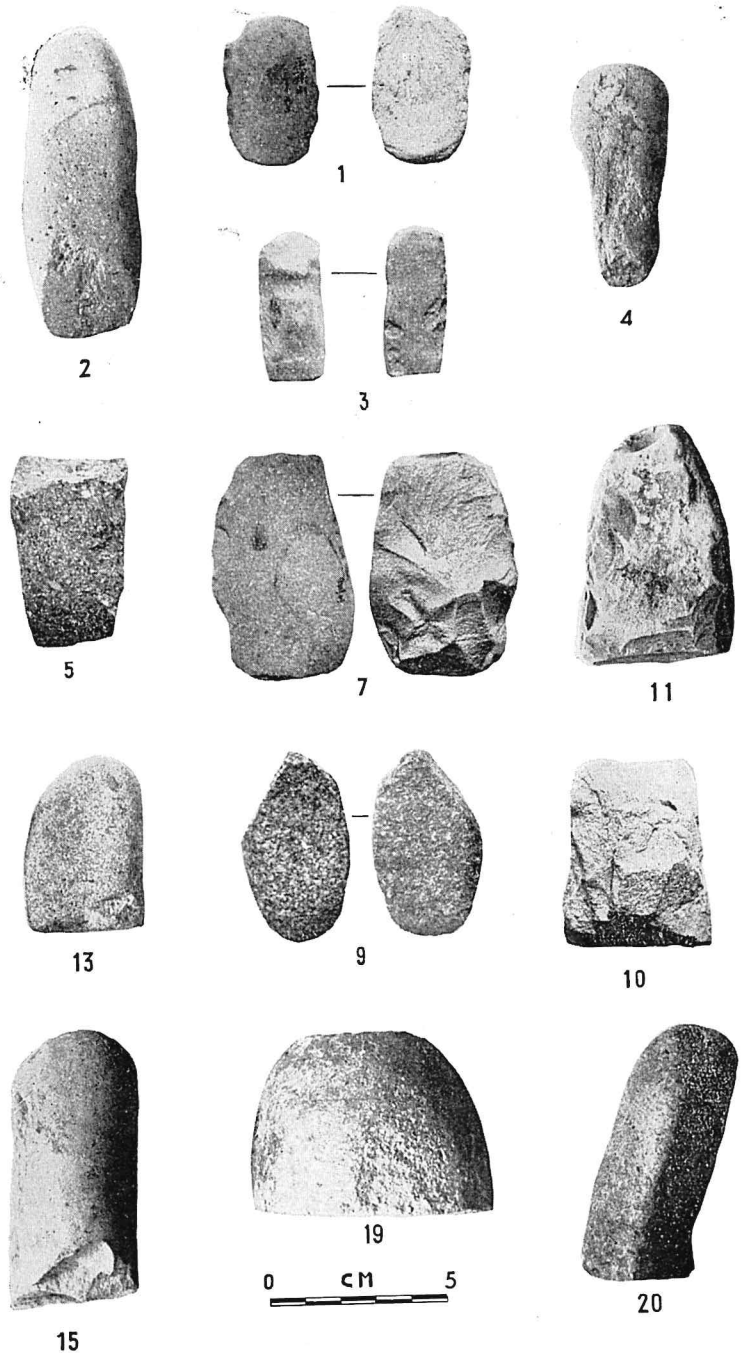
平根山遺跡土器（一）

（第三図版）



平根山遺跡土器 (二)

（第四図版）



平 根 山 遺 跡 石 器

横須賀市平根山遺跡

赤星直忠
岡本勇
村越潔

一、前がき

平根山は浦賀港口南側の山である。江戸時代末期に平根山台場が築かれたところであり、更に明治政府によって東京湾防衛の要地として要塞が築かれたところでもある。此処に縄文土器遺跡があることは終戦直後東京湾要塞に関する記録をまとめる目的で砲台内を詳細調査中、二八榴砲台の南側観測所附近で無文及撚糸文のある土器片を認めたことによって知ったが大したことはないと考えていた。ところが其の後この辺一帯を踏査した岡本勇は更にその東方緩斜面の畑地において撚糸文土器片とその包含層の残存するらしい部分のあることを知った。そこで昭和三十一年度の当研究室の仕事としてこれを調査することとなったので赤星を調査責任者とし、横須賀考古学会の諸君が発掘を担当することになったものである。本調査は昭和三十一年十二月二十一日から二十六日まで六日間にわたって行われた。

横須賀考古学会員の参加者次の通りである。

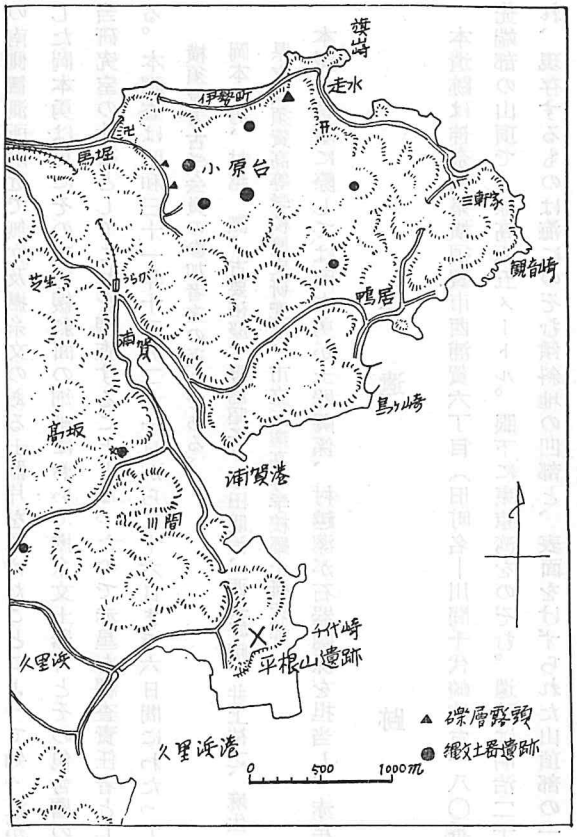
岡本　勇、村越　潔、古要祐慶、野島昭子、塚田明治、西条好晴、井上祐之、麻生　優、茂串昌夫、井上幸久、小林三郎、鈴木　泰、幡野知代、高橋四郎

県立横須賀高等学校歴史研究部、市立工業高等学校郷土研究部

本報告執筆に際しては岡本勇が土器関係、村越潔が石器関係を担当し、赤星がその他事項を補ってまとめた。（赤星）

二、遺跡

本遺跡は神奈川県横須賀市西浦賀六丁目（旧町名―川間千代崎砲台一八〇番）にあり、北西より南東に走り、浦賀港の南岸を形成する丘陵の最先端部の山頂で、標高六五メートル。眼下に東京湾をのぞむ。遺跡は明治二十五年砲台を建設するとき表面を削られ、中心部を大きく掘り切られ、現存するものは海にのぞむ傾斜地の凹部と、表面をけずられた山頂部の一部にすぎない。今回の調査は前者に対して行われたものである。本

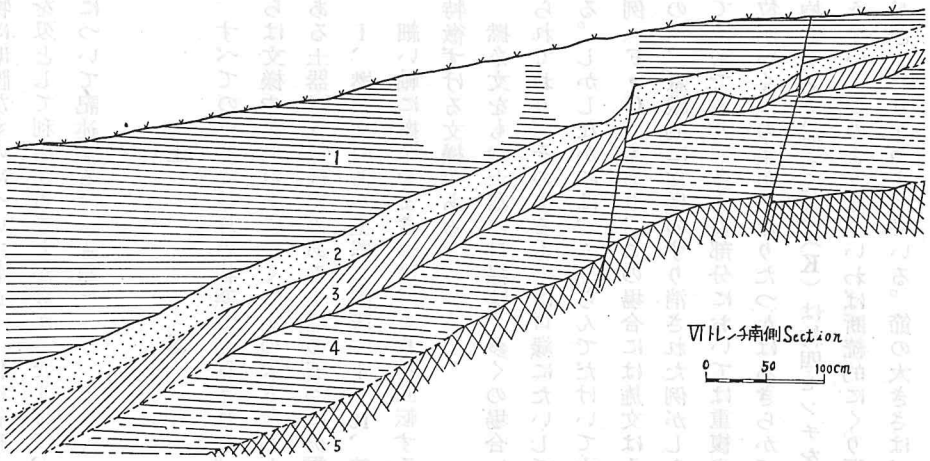


遺跡は山頂部から東の緩傾斜面にわたって土器片の分布がみとめられるが、その範囲は東西三〇メートル、南北一〇メトル位のものであり、その中央が南北に幅一五メートルばかり掘切られており、調査された部分はその東端の緩斜面にすぎない。尚本丘陵各所に類似の土器片を僅かずつ散見するがまとまった遺跡はないようである。トレンチはこの緩斜地に東西方向に一米間隔で掘られた。（赤星）

発掘は、まず傾斜地の凹部北端に幅一米長さ五米のトレンチを東西に入れ、遺物の包含および層位関係の観察をこころみた（これをⅠトレンチとする）。その結果、腐植土の堆積と遺物包含の状態が良好であったので、さらに南側へⅡからⅥまでのトレンチを適宜に設定した。Ⅱ・Ⅴ・Ⅵの各トレンチにおいては、遺物の包含量も多かったが、Ⅲ・Ⅳは少く、とくにⅣは傾斜面の末端で崖に近いため、腐蝕土が厚く堆積し、調査の困難を思わせたので完掘されずに終った。以上の結果からみると、遺跡の、したがって遺物包含層の中心は、Ⅰの南半よりⅤの北半、およびⅣの西半をむすぶ範囲であると思われる。

第2図は、Ⅵトレンチ南側のセクションである。表土（1）は西側で約三〇糎、東側で一八〇糎の厚さをもち、黒色の腐蝕土からなっている。その下には、わずかに砂質を呈する暗褐色土層（2）が約三〇糎つづき、さらに平均四〇糎の厚さをもつ純褐色土層（3）へと移行し、ついでローム質土層（4）約七〇糎となり、最後にローム層（5）となっている。遺物は、これらの各層から発見され、ローム層に接して出土したものも、二・三みとめられた。図のなかでの表土内の空白は、攪乱された部分をあらわしたもので、おそらく樹根の堀返しのさいの痕跡と思われる。その他、トレンチ内に数ヵ処の断層がみられたが、第2図にしめした二本の不整合線はその例である。これらはいずれも東北より西南の方向に走っていた。この断層は、遺跡の形成後の地盤変動をあらわすものである。

つぎにこの遺跡における層位と土器の出土との関係を記しておきたい。まず最下層のローム質土層からは、縄文・撚糸文のある土器のみが純粋に発見され、その上の純褐色土層よりは、それと無文の土器とが相半し、また暗褐色土層では無文の土器が主体をなしていた。無文の土器は後に



第2図

述べるa類をより多く含んでおり、また横走する撚糸文の一部もこの層から発見された。黒土（表土）でもおなじく無文の土器が主体をなしているが、さらにこれを上部と下部とに分けて観察すると、下部にはa類とb類の土器がほぼ同数存在し、上部にはb類がより多量に発見された。また、ここからは沈線のある土器、貝殻文のある土器なども出土した。

しかし、以上の各層に文化層としての意味をもたせるならば、ローム質土層＜褐色土層下部＞と、いわゆる純褐色土層と暗褐色土層とをふくめた＜褐色土層上部＞と、表土＜黒土＞との三つに区別すべきである。いま、これらの層と、縄文のある土器、撚糸文のある土器、無文の土器の三つの主な種類の土器との出土関係をみると、つぎのごとくである。

	下部褐色土層	上部褐色土層	黒土層
撚糸文のある土器	五九％	二二％	六％
縄文のある土器	四一％	一八％	四％
無文の土器	〇％	六〇％	八五％

なお、発掘された土器の総数は、これを破片としてかぞえると、約一六五〇個ある。このうち、その半数以上の約八九〇個は無文の土器であり、他の約七五〇個が縄文・撚糸文のある土器である。（岡本・村越）

三、遺物と其の考察

包含層からは土器片一六五〇片が採集されたが、それらは褐色土層と黒色土層に於いてそれぞれ各種の土器に分けることが出来た。これらの土器に伴って石器として使用されたことの明らかな磨製部分を認められるものと打痕又は打欠きのあるもの少数の他に極めて多量の礫及礫を打割ったものが採集せられた。これら礫を打割ったものの中にも使用痕をとどめる多数のものがあり、これらはすべて使用されたことが明らかであるが、その全部について記述することはわずらわしいので、

特に明瞭なものについて記述し、他は省略した。本遺跡に於いては充分整形し所謂石器の形としたものが殆んどなく、礫を打割ったとき出来た稜を刃として利用することが多かったようで、それらの稜には使用による磨滅や刃こぼれ状の認められるものが相当量存在する。以下土器及び石器について記述する。（赤星）

土器

すべての土器は破片の状態で発見された。その総数は約一六五〇をかぞえるが、いずれも早期の前半に属する縄文式土器である。しかし、これらは文様や器形の上にいくつかの大きなちがいを示している。いまそれを、1撚糸文のある土器、2縄文のある土器、3無文の土器、4沈線文のある土器、5貝殻文のある土器の五つに分類し、それぞれの説明と型式上の考察をこころみようと思う。

1、撚糸文のある土器（図版二1―16、第3図A―M）

細い軸に撚糸をまきつけ、これを回転することによってえられる文様、すなわち撚糸文は、縄文とならんでこの遺跡の下層（褐色土）の土器を特徴ずける文様である。

撚糸文をもつ土器の口縁は、多くの場合いくらか外反し、かつふくらみを呈している。そして、このふくらんだ口縁の上端には、撚糸文がつけられており、そのあるものは口縁にたいして直角あるいは斜に（A・B・C・I・L）、あるものは平行に（D・H）、それぞれ施文されている。しかしなかには、ふくらんでだけいて文様をもたないものがある（K・M）。また、それらとは別に、僅かではあるが口縁にふくらみのない例（F・G）もあり、この場合には施文はみられない。口縁以下は例外なく撚糸文によってみたされているが、なかには口縁直下の部分に限ってのみ、意識的に文様のすり消された例がしられている（D・M）。撚糸文は縦あるいは、いくらか斜に器面を走っているが、その条の間隔は概して緻密であり。多くの部分においては重複さえしている。だが一方粗い間隔の撚糸文もきわめて僅かではあるが認められる（I）。撚糸文の一単位がいくつの条からなりたつかはあきらかでないが、あるものにはそれの回転施文された一連の長さがあらわされている。ひとつの例（A）は平均七センチ、他の一例（K）は約四センチをかぞえる。これらは、こころもち弧状をなしており、その圧痕はふかく明瞭であるが、末端ではあさくうすい。このような、いわば断続的にくり返し回転施文された撚糸文の手法は、注意されてよいだろう。条をつくる節もまた、そのひとつひとつがぎっしりとつまっている。節の大きさは、ほぼ一定しており、いちじるしい差はみられない。すべての土器片にみられる撚糸文の節は、条の走向にたいして例外なく右傾している。これは、左撚りの繊維束をさらに一度だけ撚ったもの＜R＞を軸にまきつけ、原体としていたためである。

以上に説明した一群の土器は、横浜市南区大丸遺跡の下層から発見され、われわれが大丸式とよびはじめた型式の土器に対比することができ

る（註1）。また、三浦半島においては、野島貝塚貝層下土層、夏島貝塚第一貝層下層、および平坂貝塚下層などで発見された土器の一部のなかに、その類例が求められる。この遺跡から出土した撚糸文の土器のほとんどすべては、「大丸式」とみてよいであろう。しかし、口縁にふくらみと文様をもたない少数の土器は、厳密にいえば大丸式にふくめることに疑問がある。これらはどちらかといえば、大丸式につづく夏島式により類似した傾向を示している。だが、夏島式土器にともなう縦方向の特徴ある縄文が、この遺跡ではまったくみられないし、また出土の層位もいわゆる大丸式と区別できなかった。

黒土層および褐色土層上部より発見された数片の撚糸文の土器（図版二32、第5図A・B）は、以上のものと区別して記述されなければならない。それは、たんに黒土層等から出土したという理由からではなく、その撚糸文が器面を横に走る特異なあり方を示しているためであり、また他の性状においてもかなりちがっているからである。すなわち、この土器は赤味がかった褐色を呈しており、黒褐色ないし黄褐色を一般とする他の撚糸文の土器と容易に識別される。また、表裏面はともによく磨かれ、きれいな地肌をあらわしている。さらに、この土器の口縁の形は、直行したその上端が丸味を示すのみであり（第5図A）、他の撚糸文の土器とおもむきを異にしている。口辺部（A）においても、また、底部の近く（B）においても、ともに撚糸文は横に走っているが、前者の場合にはその圧痕が不鮮明である。これは粘土がよく乾燥してから押捺されたためであろう。これらの撚糸文については、乏しい資料のために決定的なことはいえないが、その条間隔は下層のものに比較していくらか粗く、また、節は条の走向にたいしていずれも右傾しているが、この点は他の撚糸文の例＜R＞にひとしい。

これらの土器は、かつて赤星直忠を中心として横須賀考古学会が三浦市南下浦町大浦山遺跡を発掘し、その資料にもとずいて「大浦山式」と仮称した撚糸文土器の型式にふくめられるものである。なお大浦山式土器には、口縁が「く」の字形に外曲する種類のものが知られているが、今回の発掘資料のなかにかかる例は見出されなかった。われわれは、この型式の土器の編年上の位置を撚糸文土器群の終末に考えているが、これについては、いまだ決定的な裏付けがない。土器自体の示す形態（文様・器形）の諸傾向と、またこの遺跡でもそうであったように、撚糸文土器群に後続する「無文土器」と、つねに混在して発掘されるという事実にもとずいて推定が許されている程度である。今回の発掘の所見とその資料からも、それ以上のことはいえない。大浦山式土器は、他に小原台E地点遺跡で無文土器とともに採集されており、また、横浜市南区十王堂免遺跡からは、この型式の内容を充分に知ることのできる多量の資料がえられている（林国治氏資料）。

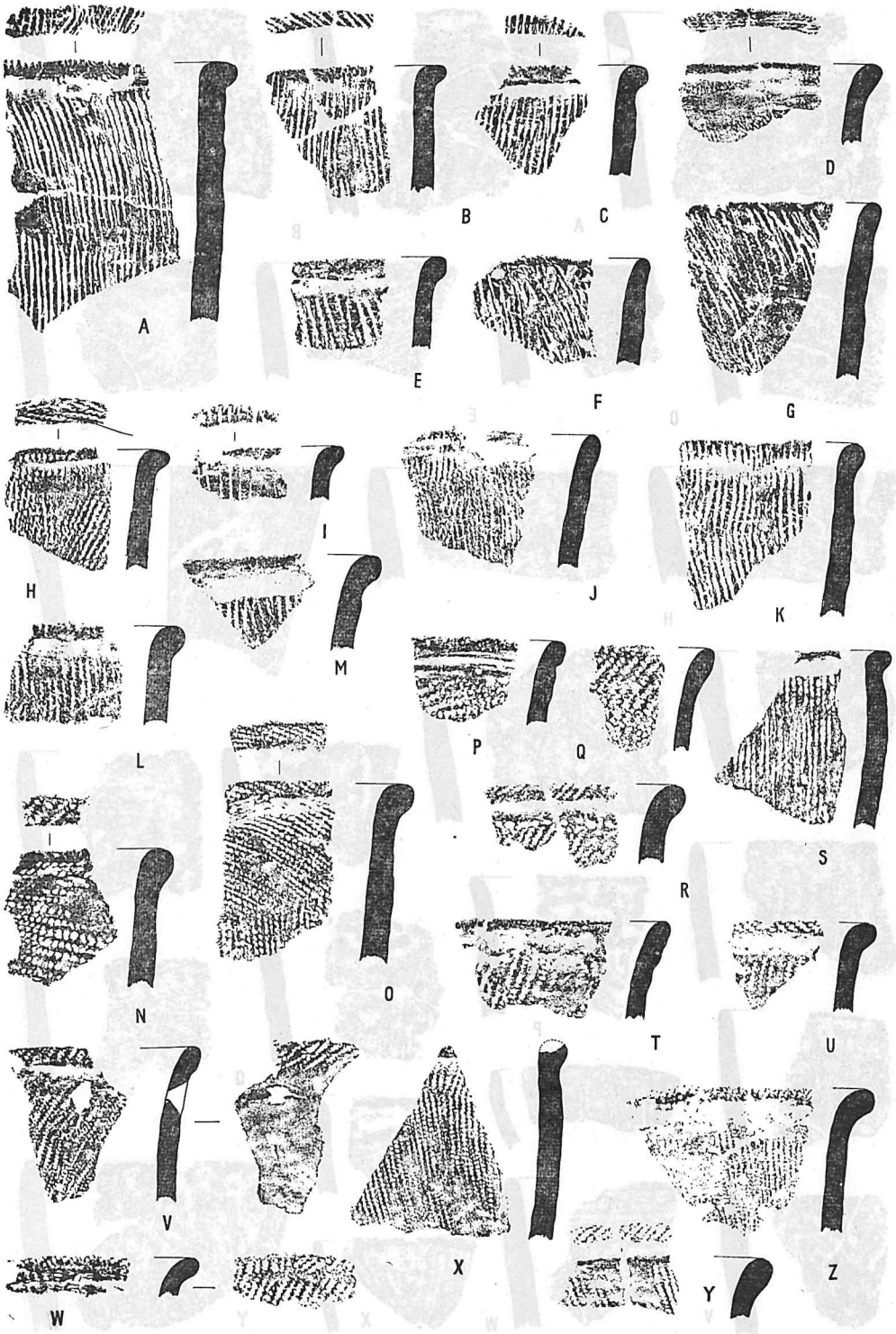
2、縄文のある土器（図版二17—28、第3図N—Z）

撚糸自体を回転したいわゆる縄文の土器は、そのほとんどが撚糸文の土器とともに下層から発見された。

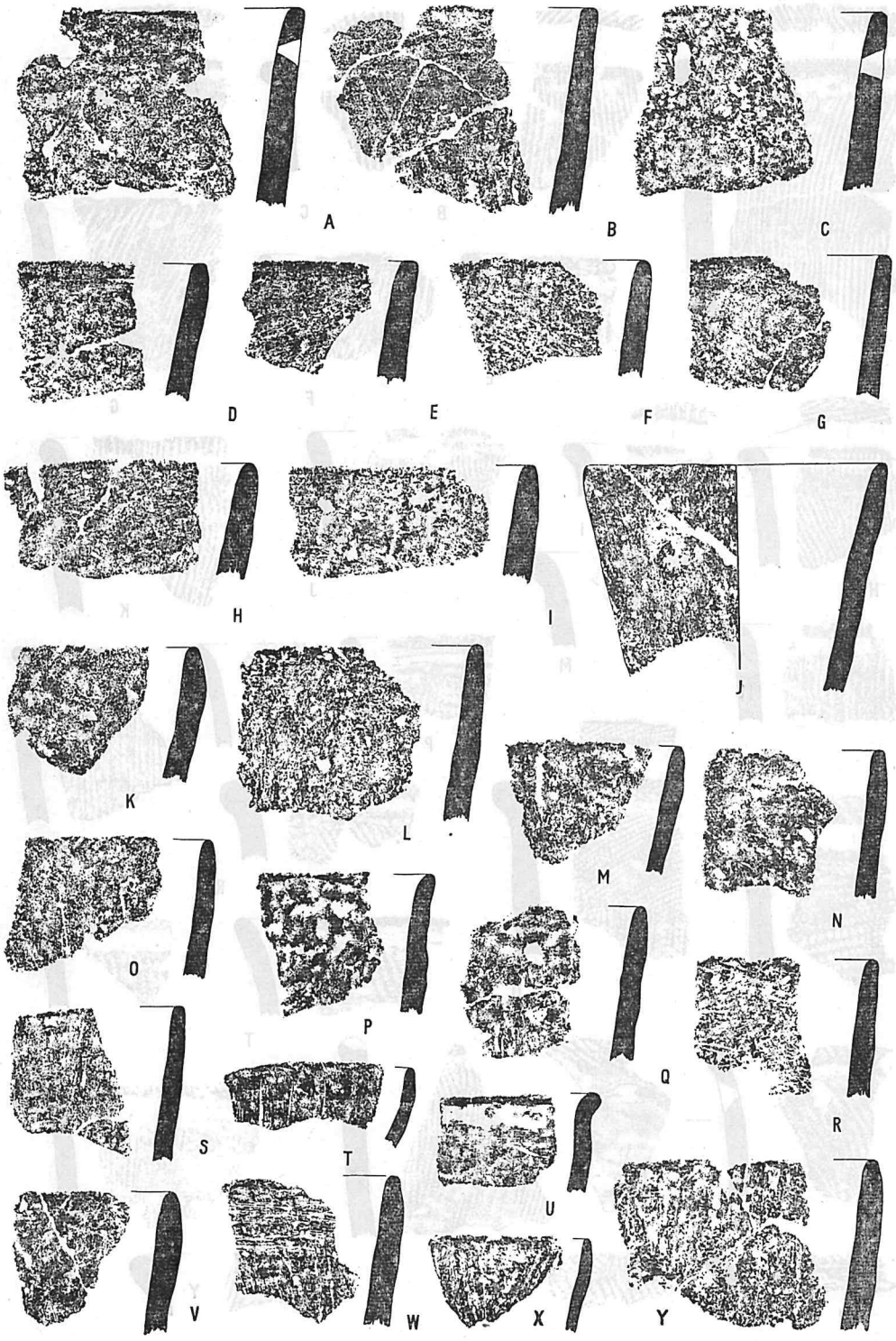
この土器の口縁は、撚糸文のある土器のそれとひとしく、すべて例外なくふくらみを呈し外反している。しかし、ふくらみの度合はかならずし

も一様ではなく、極端にふくらんでいるもの（N・O・Zなど）と、そうでないもの（P・Q・Tなど）との差がみとめられる。口縁の上端には、普通斜の縄文がつけられているが、なかにはそれがさらに内面にまで及んでいるものがある（V・W）。またそれらとは逆に、わずかにふくらんだ口縁の外側にのみ施文の限られているもの（P・U）もあり、これは口縁端に文様をもたない少数の例（S・T）をもふくめて、概してふくらみの度合が弱い。口縁の縄文は、いずれも斜行しており、これには口縁以下に走る縄文と同方向のもの（O・P・R・V・Z）と、異方向のもの（N・Q・U・Y）とがあるが、それほどふかい意味はもたないと思われる。口縁直下には無文部を残すものが多く、これにはあきらかに後ですり消されたもの（P・S・R・U、20・22・23・24）と、ふくらみの度合がいちじるしいために、その直下には文様が押捺されえなかったもの（O・Z、17・18）とがみられるが、ほとんどは前者の例に属する。また、そのすり消された口縁の直下には、刺突をもつ特殊な例（R、22）が見出されるが、これは先端のいくらか尖ったものによって並列的につけられ、一種の文様効果をあらわしている。なお、補修のためにあけられたと考えられる円い小孔を有する破片（V、19）があるが、この孔の表面には上下にながいきずが残されている。口縁以下の縄文には、その条がほぼ縦に走る場合（S・U・W・X・Z、17・21・23）と、斜めの場合（N・O・R・T・V、18・19・22・24・27）とがある。しかし、胴部以下のすべての破片がいずれも縦方向の縄文であることからおして、その後者は一部のもの（O、18）にみられるように（註2）、口辺部付近においてのみ斜走向を示すにすぎないことがあきらかである。これらの斜走向の縄文をもつものの多くは、口縁のふくらみが比較的いちじるしく、また、その出土はほとんど褐色土の下部に限られていた。条の走向には、左傾するものと右傾するものとがあるが、比率は前者の方が多い。条の走向にたいする節のあり方は、縄文の種類をきめるための手がかりである。左に斜行する縄文は、その節が多くの場合条にたいして右傾しているが、これは原体を横に回転した＜RL＞の縄文を示すものであり、この遺跡で発見された縄文のうちもっとも多い種類である。また、右に斜行する縄文のうちには、その節が右傾するものと左傾するものとの二種類がある。前者は、口縁にたいし縦方向に回転した＜RL＞の縄文をあらわし、後者は＜LR＞の縄文原体を横に回転したものと思われるが、その存在は稀である。条の縦に走る縄文の種類にも、＜RL＞と＜LR＞の二種類がみとめられるが、多くは＜RL＞を示している。なお、縄文のある土器の破片総数二百数十のうちに、無節（0段）あるいは一段撚りの縄文は見出されなかった（註3）。

この遺跡から発見された縄文のある土器の大部分は、その型式がいわゆる井草式にふくめられるものである。とくに、口縁がいちじるしくふくらみ、その上端に施文をもつものは、井草式土器のメルクマールを完全にそなえたものとして疑う余地がない。しかし、なかにはそれらの特徴をはなれたもの（S・T、25）がないわけではない。千葉県香取郡西之城貝塚の発掘を契機として、井草式土器の細分が問題となった（註4）が、たしかにこの型式の土器は、三浦半島での他の遺跡の例にてらしてみても区別さるべき可能性を示している。平根山遺跡においても、いわば典型



第３図　　平根山遺跡　撚文糸・縄文のある土器　（三分ノ一大）

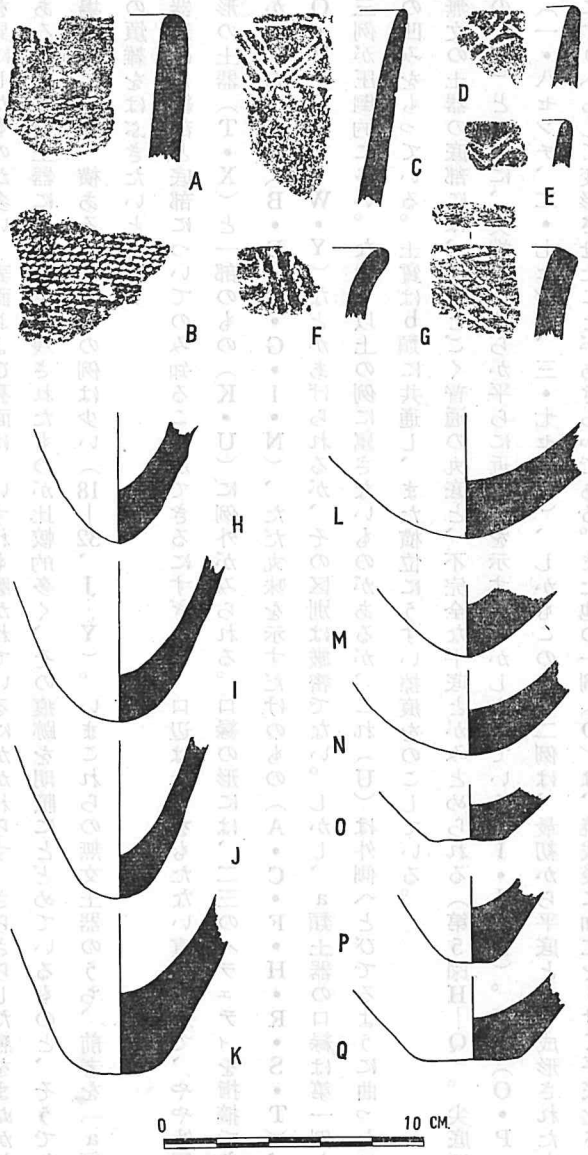


第４図　平根山遺跡　無文の土器　（三分ノ一大）

的な井草式土器（N・O・R・Z、17・18・22・27）は最下層から発見され、他のものとの間に漠然とではあるが上下関係を維持している。井草式土器の細分の問題をもふくめて、縄文および撚糸文のある土器についての型式論的な考察は、つぎの項にゆずりたいと思う。

ただ一例ではあるが、とくにとりあげて説明しなければならない破片がある（第5図F、26）。それは正確にいえば縄文ではなく撚糸（縄）自体を回転せずに押捺した文様であり、また黒土層から発見されたことからおしても他の縄文の土器と区別すべき性質のものである。この土器の口縁は、かなり外反しているが、その先端はたんに丸味を示すのみである。口縁と平行に三条、おなじくほぼ斜に三条の撚糸（縄文原体）の押捺されたものを文様としているが、これは部分をあらわすのみで、全体としていかなるモチーブを構成していたかはあきらかでない。この文様の原体は＜RLＶの撚りからなっている。

このような土器の存在を、われわれはいまだ知っていない。口辺に撚糸自体を押捺する手法は、花輪台式土器（註5）の主要な特徴とされているが、それとはかなりおもむきを異にしており、また口縁部の形にもちがいがある。型式的には、現在認定されているいかなる型式の土器にも属



第5図　平根山遺跡

撚糸文・縄（圧痕）文・沈線文および貝殻文のある土器

無文の土器の底部

さないし、また、この遺跡の他の土器型式にもふくめることはできない。しかし、たった一片の出土であることから想像して、「無文土器」あるいは大浦山式土器に伴存したものと考えられるが、もちろん確言は許されない。新しい資料の発見をまって解決したいとのぞんでいる。

3、無文の土器（図版三I—32、第4図A—Y）

文様をもたない一群の土器は、この遺跡から発見されたものの過半数をしめ、上層（黒土）の主体をなしているが、その一部は下層にも及んでいる。文様のないこととひきかへ、この土器の土質や部分的な器形はこまかに観察されねばならない。大きくみて、土質の面には二つの差別がみとめられる。一つは、いわば軽しょうな感じのきわめて強いもので、水に溶けやすい性質をもっている。それらは、ほとんどすべて灰褐色を呈し、胎土は普通にみられるものと異って粘着性に乏しい軽い土からなっているので、他との識別が容易である。表裏面はともに磨かれ、滑らかとなっているが、ときおり器面調整の際に生じたかすかな擦痕が残されている（図版三I—17、第4図A—I）。他の一つは、ごく普通の土質であり、粉末状の長石を多くふくんでいるのがめだつ程度である。土器の色は、黝黒色・茶褐色・黄褐色などさまざまであり、同一の破片で部分的に色を異にしたものが多い。表面および裏面は、いずれも磨かれているにかかわらず、ざらざらした感をまぬがれないのは、ひとつには土質のせいであろう。この土器には、擦痕の残されたものが比較的多く、その痕跡を明瞭にとどめているものと、そうでないものとがある。その方向は多くの場合縦に走り、横あるいは斜めの例は少い（18—32、J—Y）。いまこれらの無文土器のうち、前者を「a類」、後者を「b類」と区別し、説明の煩雑をはぶきたいと思う。

器形は口縁部と底部についてのみ知ることができるにすぎない。口辺はそりをもたない直行の形で、やや外側へひらくのを普通とするが、ただ小形の土器（T・X）と一部のもの（K・U）に例外がみられる。口縁の形には、二三のバラェティを指摘できる。断面をみると、その先端がわずかに平らなもの（B・D・E・G・I・N）、ただ丸味を示すだけのもの（A・C・F・H・R・S・T）、いくらか尖りぎみのもの（J—M・O・P・Q・V・W・Y）などがあげられるが、その区別は厳密でない。しかし、a類土器の口縁は第一例と第二例に限られ、b類の場合には第三例が圧倒的に多い。なお、以上の例に属さないものがあるが、これ（U）は外側へとびでるように曲った口縁を示し、そしてそれと平行に一条の凹みをもっている。土質はb類に共通し、また横位にうすい擦痕をのこしている。

無文の土器の底部には、尖底とごく普通の丸底と、不完全な平底とがみとめられる（第5図H—Q）。尖底は鋭角なもの（H）と、やや鈍角のもの（M）との他に、尖端がいくらか平らに近い形を示すものがしられている（I・J・K）。平底（O・P・Q）は、その底径がきわめて小さく（一・八センチ、二・七センチ、三・七センチ）、しかもこのうち二例は、最初から平底として成形されたものではなく、尖底のものを焼成以前にすりへらして変形させたことがあきらかである。また他の一例（O）は、焼成後に加工をうけて平底化されたものである。ところで、これら

の底部のうちa類に属するものには、丸底と焼成後に平底化されたものとがあげられ、b類にはすべての尖底といわゆる平底とがふくめられる。この底部の形にあらわれたちがいは、その上につづく器形の相違をも暗示している。なお、無文の土器のなかには、口径一〇センチ前後およびそれ以下の小形の土器が比較的多く、とくにb類に顕著である。また、縦に細長い口辺部の補修孔とは別に、口縁に切込みをもつ例が注意される。

現在われわれは、平坂貝塚の無文土器を「平坂式」とよび、撚糸文土器群につづく型式としてとりあつかっているが（註6）、この遺跡の無文の土器は型式的にみて、それとちかい関係にあることがあきらかである。しかし、平坂貝塚の無文あるいは擦痕の土器のなかには、a類に属するものは稀であり、大部分はb類にひとしい。これに反し、三浦市大浦山遺跡から発見された無文の土器は、そのほとんどすべてがa類と共通のものである。これらのことからおして、a類とb類は型式的に区別すべきものであるかもしれない。発掘の所見では、a類が下部に多いという相対的な傾向を示していた。なお、口縁と平行に一条の凹みをもつ土器は、その類例が平坂貝塚および川崎市中谷遺跡（註7）などに見出され、またさらに花輪台Ⅱ式土器との関連が考えられるが、もとより感性的な比較にすぎない。

4、沈線文のある土器（図版二29・30・31、第5図C・D・E）

わずかではあるが沈線によって文様のかかれた土器が、黒土層の比較的上部から発見された。これらの土器はいずれも小形であり、その土質や色や他の感じは、b類の無文土器によく似ている。またその先端が丸味をおびて薄くなる口縁部の形も、b類の場合にひとしい。文様は簡単であり、しかも口辺部付近にのみ限られている。そのうちのひとつは、口縁と平行の区劃のなかに三本ないし四本の斜線が交互にかかれ、いわば鋸歯状のモチーフをあらわしており、またその下端にはいくつかの短線がならんでいる（C・29）。他には、二本の平行線が鋸歯文を表現しているものと、おなじく弧線のかさなりあっているものとがみられる（D・E、30・31）。これらの文様は、いずれも先端の鋭い物でかかれているが、竹管は利用されていない。

このような沈線を文様とする土器は、その類例を他に求めることが困難である。ただ、かつて白崎高保、江坂輝弥両氏によって「栗原式」（註8）と称された東京都板橋区栗原遺跡の土器のなかに、「口縁に平行の二条の沈線間に鋸歯文を入れる等」（註9）のおなじ文様構成がしられている程度であろう。けれども、いわゆる「栗原式土器」なるものは、今日研究史上の言葉として存在するのみであり、したがってこれらの沈線文をもつ土器は今後あらためて問題とされるべきものであろう。ここでは、たんにそれとb類の無文土器との関連を指摘するにとどめたい。

5、貝殻文のある土器（図版二33、第5図G）

黒土層の上部より、貝殻文をもつ土器の一片が出土している。この土器は灰褐色を呈し、厚さ約一センチ、繊維はふくんでいない。外側へそいだような口縁が特徴的であり、肋脈のある貝殻の腹縁を施文具とする文様は、その口縁端にもおよんでいる。この土器は、三戸式あるいは田戸下

層式（註10）に属するものと思われるが、口縁の形や貝殻文のモチーブからすれば、むしろ後者に該当すべき型式であり、したがってこの遺跡でのもっとも新しい土器といえるわけである。（岡本）

（註）1　芹沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」駿台史学第7号

2　しかし、この土器片（図版二18、第3図O）の胴部に縦に走っているものは、実際には＜R＞の撚糸文であり、縄文と撚糸文とが一つの土器において併用されていることを示している。

3　縄文の種類をあらわす記号等については、山内清男氏の最近の著作を参照されたい。（世界陶磁全集第一巻、座右宝刊行会発行）

4　西村正衛、金子浩昌、芹沢長介、江坂輝弥「千葉県西之城貝塚――関東縄文式早期文化の研究――」石器時代第2号

5　花輪台式土器は、その分布の中心が利根川下流域にみとめられており、神奈川県下には未発見である。（甲野勇、吉田格「花輪台式文化」縄文式文化編年図集一）

6　岡本勇「相模平坂貝塚」駿台史学第3号

7　岡本勇「神奈川県川崎市中谷遺跡」日本考古学年報1

8　白崎高保「東京稲荷台先史遺跡」古代文化一二巻八号

9　江坂輝弥「廻転押捺文土器の研究」人類学雑誌五九巻八号

10　赤星直忠「古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて」考古学七巻九号、赤星直忠「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」史前学雑誌七巻六号

縄文・撚糸文のある土器についての考察

千葉県西之城貝塚の発掘によって、今まで井草式とよばれてきた土器は、さらに細分されねばならぬことが問題となった。即ち、この貝塚の貝層下の褐色土層からは、口縁の肥厚・外反のいちじるしいものが発見され、またその上層にあたる下部貝層よりは、そうした表現に乏しい井草式土器が出土した。さらに前者は縄文のみに限られるのにたいし、後者にはわずかではあるが撚糸文の土器（大丸式）がともなっていた（註11）。これらのことから、井草式土器はふたつの傾向をもつものとして、ⅠおよびⅡの型式的な区別を与えられたのである。平根山遺跡の井草式土器をこの見解にてらしてみると、ここでも口縁の肥厚・外反のいちじるしいものが最下層（褐色土下部）に多く見出された。しかし、それとともにより多く（六七割）の撚糸文の土器（大丸式）を共存していた点は、西之城貝塚の場合に相異している。この縄文と撚糸文の不均衡なあり方は、撚糸文土器群の内部における地域差を反映するものであろうか（註12）。それとも少い資料が全体の一面をのみあらわしているにすぎないためであ

ろうか。だが、このような問題を正しく解決にみちびいていく方法は、いうまでもなくそれぞれの地域――たとえば、三浦半島とか、多摩丘陵南部とか、武蔵野台地とかいう範囲――ごとに、撚糸文土器群の型式の編年をつくりあげていくことである。

一九五七年（昭和三二）の秋、横須賀考古学会によってすすめられた馬ノ背山遺跡（三浦郡葉山町木古庭）の発掘は、ひとつにはそのような課題――三浦半島における撚糸文土器群の編年――をになっていた。この遺跡からは、平坂式、三戸式（楕円捺型文をともなう）、茅山上層式などの型式に属する早期縄文式土器とともに、一種の井草式土器が発見された。それは、口縁の肥厚・外反が極度にいちじるしく、またきわめて細い緻密な撚糸文を口辺部、口縁、ならびにその裏面にまで施している。さらに、この細い緻密な撚糸文＜R＞は、横位――あるいは稀にわずか斜め――にすきまなく押捺されているが、口辺部のそれの下はつねに縦方向の縄文となっている。この土器は、独自な撚糸文の施文をもつことにおいて、井草式一般とはあきらかに区別されるものである。もし、口縁の肥厚・外反のいちじるしいものが井草式土器の古い要素を示すならば、これは撚糸文の土器をほとんどまったくともなっていないことと考えあわせて、その編年上の位置が問題として提起されるのである。おそらく平根山の最下層から発見された井草式土器よりも、さらに古い型式であると考えねばならない。平根山遺跡では、ふたつの傾向をそなえる井草式土器の分離がかならずしも充分ではないが、これは他の遺跡の資料を援用することによって、かなり明確とすることができる。すなわち、大丸遺跡下層ならびに夏島貝塚第一貝層下層などからは、大丸式土器にともなって口縁の肥厚・外反のより弱い井草式（Ⅱ）土器のみが発見されており、しかもこの場合、撚糸文（大丸式）は縄文（井草式Ⅱ）よりも数の上ではるかに多い（註13）。

これらのことを綜合すると、三浦半島発見の井草式土器のなかには三つの傾向を指摘することができる。そして、新しい要素をもつものほど、より多量の撚糸文の土器（大丸式）をともなうのではないかと考えられるが、もちろんそれらはたんなる予想にひとしい。これの問題については、他地域との関連を重視しながら、今後いっそう追求をふかめていかなければならない。なお、井草式土器の細分については、馬ノ背山遺跡の報告のなかでとりあげたいと思っている。（岡本）

無文の土器についての考察

無文の土器は、縄文・撚糸文のある土器との間に明瞭な層位を保っていないが、それが年代的に降るものであることは、いまここに縷述する必要もない。平根山遺跡の無文の土器には、ふたつの種類がみとめられるが、そのひとつ（a類）は大浦山遺跡の無文の土器の主体をなし、他のひつ（b類）が平坂貝塚での無文の土器の中心となっているという事実は、ほとんど混在的に発見されたそのふたつの種類に、なんらかの秩序を与えるものであろう。しかし、これを大浦山遺跡と平坂貝塚のふたつの遺跡の間の空間的な差に関係づけることが無意味である以上、それらは時間

的な差にもとずくものとしてとらえねばならない。平根山遺跡での両者の出土関係は、大きくみて混在の状態にあるが、もっとも慎重に層位的発掘のおこなわれた第Ⅳ区の所見によれば、黒土層の上部にはb類（約七割）が多く、下部ではほぼ同数であり、褐色土の上部においてはa類（約七割）がかなり多かった。この事実に、大きな期待をおくならば、両者のきわめて密接な関係を考慮しながら、a類をより古い所産とすることが可能かもしれない。年代的には、撚糸文土器群に後続し、一方三戸式・田戸下層式などの沈線文土器群に先行する無文土器群のなかに、いくつかの種類の系譜を認めえたとしても、なんの不思議はないであろう。われわれは、無文土器群のなかにすくなくともふたつの種類と、その時間的な関係のあることを、ここに主張しようと思う（註14）。

ところで、平根山遺跡から発見された沈線文のある土器は、その性質と出土の層位よりみて、おそらく無文土器b類にともなったと考えられるが、この場合の沈線文の出現とその文様のモチーブは、沈線文土器群（三戸式・田戸下層式）への移行を暗示するものであろう。無文土器群と沈線文土器群との関連は、ほとんど空白としてのこされていたが、この新しい土器の発見によってひとつの見通しが与えられ、両者の間に他の種類の土器の介在をかならずしも考える必要をもたなくなった。また一方、撚糸文の横走する土器、すなわち大浦山式土器は、黒土と褐色土から出土したが、これは無文の土器にともなったものか、あるいは単独に存在していたものかは、あきらかでない。しかし、大浦山遺跡でそれと無文土器a類とが他を混えずに発見されていることからおして、そこには茨城県花輪台貝塚における縄文の土器（Ⅰ式）と無文の土器（Ⅱ式）との場合のような両者のふかい関係が考えられる（註15）。

さきにふれたごとく、沈線文のある土器は、きわめて小形の器形からなりたっているが、これと同じ程度に小形のものが、三戸式土器のなかにもかなり多く見出され、その文様構成の類似とともに、両者のつながりを示しているように思われる。ところで、このような小形の土器は撚糸文土器群の終末の時期にあらわれはじめ、無文土器群の時期に一般化したように考えられるが、このことは時を同じくしてあらわれた「平底」の出現等とならんで、土器の器形上の大きな変化であったといわねばならない。そして、この変化の背後には、無文土器群の時期の生活上の発展がひそんでいると想像されるのである。（岡本）

（註）11　西村正衛、金子浩昌、芹沢長介、江坂輝弥「千葉県西之城貝塚」石器時代二号

12　東京湾をさかいとして、それ以西には撚糸文が多く、以東では逆に縄文が多いというのは、芹沢長介氏の説くごとくである（前掲書）。

13　芹沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」駿台史学第七号。なお、夏島貝塚での所見は、明治大学考古学研究室によっておこなわれた第二回発掘（一九五五年）の結果によるものである。

14　かつて、蘭田芳雄氏の所有している栃木県普門寺遺跡の「無文土器」をみたことがあるが、このなかにも多くの性状において異なる二つの種類がふ

くまれていた。また、赤星直忠によって箱根仙石原で発見された無文の土器は、平根山遺跡にも類例（第4図Jなど）があるが、これらは将来別に考えられるものとなるかもしれない。

15　花輪台貝塚では竪穴住居址内での土器の出土状態によって、両種の土器の前後関係があきらかとなっているが、ある竪穴内ではその二つの種類の土器が共存していた。（甲野勇・吉田格「花輪台式文化」縄文式文化編年図集一）

石　器

平根山遺跡で発見された石器は、泥岩・砂岩・礫岩・凝灰岩など水成岩のなかで、比較的重量のある礫を原材に用いたものが多い。しかもこれらの石器のなかには従来の縄文早期の諸遺跡で、発見された石器とは異った形態を有するものもある。いずれも自然の礫塊を利用したものであるが、製作の方法は必ずしも一様ではない。即ち、礫の剝片を利用して石器とした剝片石器（Flake-tool）と、礫の一部を加工して石器とした礫器（Pebble-tool）および、石片を利用しそれに加工を施して石器としたものなどがある。さらに用途の上から考えられる敲石、形態からいう打製石斧、スタンプ形石器等の出土もみた。これらの石器を前記の順にしたがって説明してみよう。

（A）剝片石器（第四図版1・第6図1）

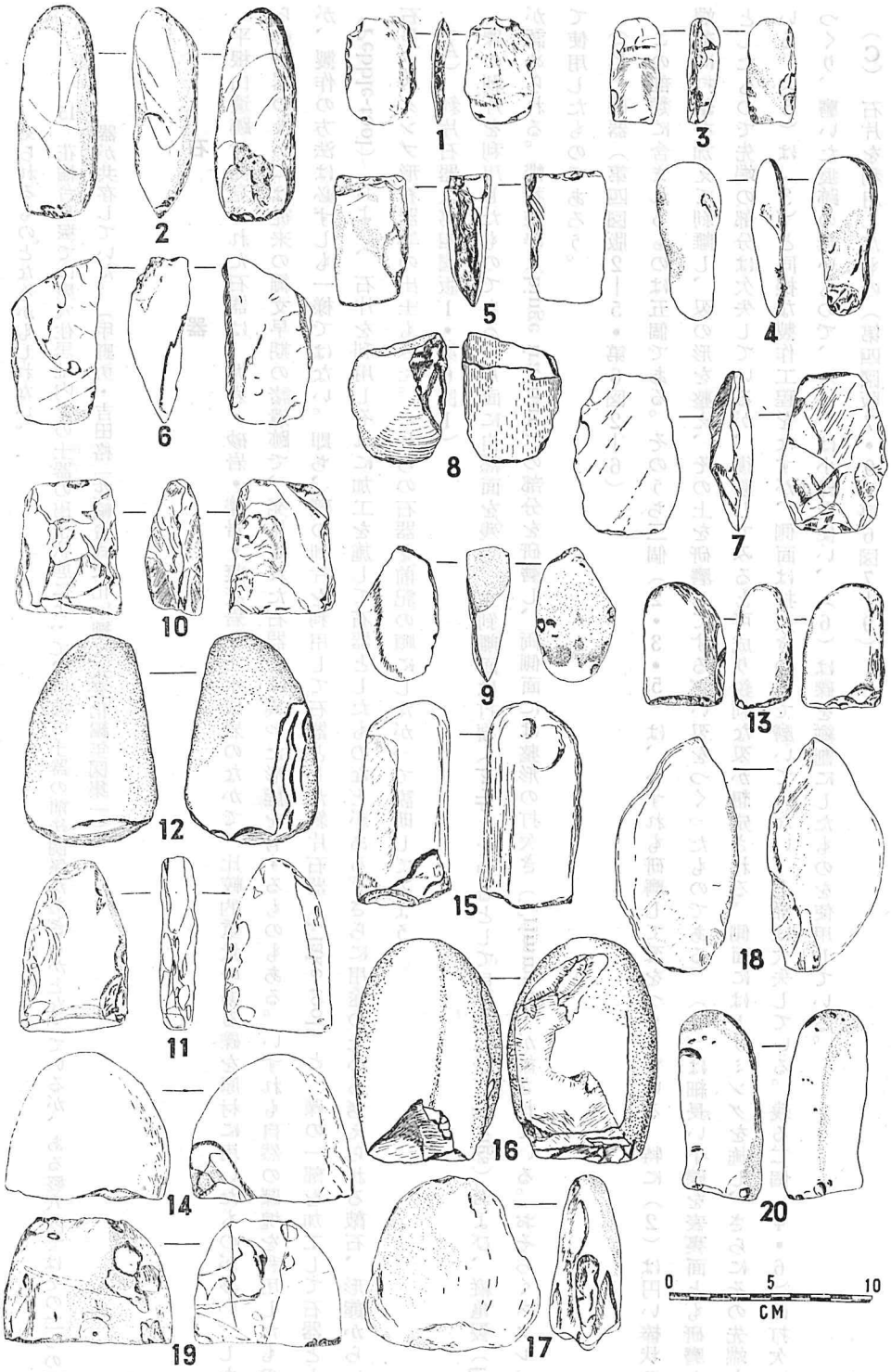
礫の剝片を利用したものである。片面に自然面を残し、主剝離面は打瘤（bulb）を中心として貝殻状裂痕（Rings）および、縦亀裂（fissure）が認められる。蝶番破砕（hinge fracture）の部分を研磨し、両側面には整形の打欠き（Trimming）が施されている。おそらくスクレパーとして使用したものであろう。

（B）礫器（第四図版2—5・第6図2—6）

この部類に含まれるものは五個である。そのうち三個（2・3・5）は、いずれも研磨して刃をつくっている。特に（2）は円い棒状の礫の先端部に打撃を加えて剝離し、刃の形を整え、その上を研磨してするどい刃をつくったものである。（3）は細長い小礫を表裏面とも研磨して石器としたもので先端の部分は欠失しているが、復原してみると可成り鋭利な刃が想定される。側面にはトリミングを施し、さらにその先端を磨いている。（5）は（3）と同様な製作工程をなすが、側面は打欠きのみで磨いていない。上部は欠失している。残る二個（4・6）は打欠いて刃をつくり、磨いた痕跡の無いもので、（4）は小礫を使い、（6）は礫を縦割にしたものを使用している。

（C）石片を利用したもの（第四図版7・9・第6図7—9）

三個発見された。すべて一方に平坦な打裂面を、他方に自然面を残すもので、特に（9）はその先端部を磨き刃をつくっている。



第6図　　平根山遺跡石器

（D）打製石斧（第四図版10・11・第6図10—12）

三個が出土したが、ともに縄文遺跡にて発見される打製石斧と、類似の形態をしめしているのでこの名称を使用した。いずれも一部分を欠失し（10）（12）は厚く、（11）は薄い。両側面には整形のあとがみられ、特に（11）は側面の一部を平坦に削り、そのため全体が不整形をなしている。

（E）敲石（第四図版13・15・第6図13—18）

この類に属する石器は、礫を横割し、その面に敲打に用いられた痕跡を有するものである。形状は半球形、棒状等さまざまであるが、そのなかで（12—16）まではハンマーであり、（18）は一方の側縁に打撃の痕跡をとどめているので、チョッパーのような役割を果したものと思われる。

（F）スタンプ形石器（第四図版19・20・第6図19・20）

二個の出土である。ともに礫を横割し、その面を使用したものと思われる。特に（19）は、頭部に若干の平らな面をもち、下部は非常に面が平坦なので、磨ることを目的としたもののようである。（20）は割れ口の個所に、こまかい剝離が縦にならんでいるが、如何なる目的に使用されたかは不明である。

以上の他に、黒燿石片、磨った痕跡の認められる石片、および軽石がⅡ・Ⅲ・Ⅴのトレンチで発見された。黒燿石の類は四片の出土をみたが、いずれもスクラップで製品はない。赤星直忠の言によると、原石は湯河原産とのことである。磨った痕跡のある石片は五糎内外の小さなもので、砥石破片の感をうける。Ⅱトレンチの1層と、3層において三個発見された。軽石は五—九糎程度の大きさである。Ⅱ・Ⅴトレンチの2・3層で出土した。

なお、参考として石器の出土地点、その層位および計測値は次表の如くである。

図番号	種類	計測値 長さ × 巾		石質	出土地点（トレンチ）	出土層	備考
1	剝片石器	5.3	3.4	泥岩	Ⅰ	4	
2	礫器	10.3	3.9	安山岩	Ⅰ	2	
3	礫器	5.1	2.3	砂岩	Ⅵ	4	下欠 部失
4	礫器	7.8	3.2	砂岩	Ⅱ	3	
5	礫器	6.4	3.9	凝灰岩	Ⅱ	1	上欠 部失
6	礫器	8.1	4.3	凝灰岩 泥岩	Ⅴ	4	上欠 部失
7	石片利用	8.8	5.1	泥岩	Ⅵ	1	
8	石片利用	6.3	4.8	礫岩	Ⅲ	2	上欠 部失
9	石片利用	6.6	3.7	?	Ⅳ	1	上欠 部失
10	打製石斧	6.6	5.1	凝灰質 泥岩	Ⅱ	4	下欠 部失
11	打製石斧	10.4	6.4	砂岩	Ⅰ	1	下欠 部失
12	打製石斧	8.4	5.3	泥岩	Ⅳ	1	
13	敲石	6.0	3.9	砂岩	Ⅳ	1	
14	敲石	7.3	7.9	砂岩	Ⅵ	2	
15	敲石	10.0	4.7	泥岩	Ⅵ	2	
16	敲石	11.1	6.9	砂岩	Ⅱ	4	
17	敲石	8.4	8.4	砂岩	Ⅵ	1	
18	敲石	11.2	5.7	泥岩	Ⅵ	2	
19	スタンプ形石器	9.2	3.8	泥岩	Ⅵ	1	
20	スタンプ形石器	6.2	8.0	礫岩	Ⅵ	3	

以上平根山遺跡で発見された石器の主なもの二〇個について概要を述べた。表にしめした如く、出土層よりみると黒土層がもっとも多く八個をしめ、次いで暗褐色土層五、褐色土層二、ローム質土層五であった。その内訳は次表の如くである。

出土層	剝片石器	礫器	石片を利用したもの	打製石斧	敲石	スタンプ形石器	計
腐蝕土層							
1		1	2	2	2	1	8

暗褐色土層 2		1	1		3	5
褐色土層 3		1			1	2
ローム質土層 4	1	2		1	1	5

右の如く、われわれは今回の調査によって幾つかの新しい事実と問題を見出すことが出来た。それは井草・大丸式土器の時期における、所謂打製石斧と剝片石器の存在である。ともに一例のみの出土にすぎなかったが、注意すべきものと思う。

打製石斧は、縄文前期以後の遺跡で発見される定形化したものと類似の形態をなしている。この製作技術の起源は縄文早期初頭に遡るのか、あるいは異質のものであるのか、今後に保留したい。剝片石器の製作技法は、一般的に行われたものだろうか。今後この類の石器が数多く発見されれば、無土器文化と縄文早期の石器との関係の有無が、ある程度明らかになると思われる。しかし、その移行過程において、両者の間に一線を画するとすれば、磨いてあるか否かの相違であろう。平根山で発見された剝片石器も、前代の技法によって製作したものと思うが、ヒンジ・フラクチャーの部分を磨いていることよりみて礫器等とひとしく、やはり撚糸文土器群の石器と解せられる。

他に礫器も出土したがきわめて少い。西之城・大丸等においてもこの時期には少いようである。それに反して礫の一端に使用の痕跡をとどめるものは多数発見された。ハンマーあるいはチョッパーとして用いられたと思われるが、その他にも万能の利器としてあらゆる部面で使用されたであろう。また拳大程度の打欠きのある礫塊は、石器の少数に逆比例して驚くほど出土しているが、この件については後述する。石片利用の石器は、Axe（斧）というよりも、Adze（削具）としての用途を果し、スタンプ形石器は押しつぶしか、敲打にでも使用したのであろうか。（村越）

石器材料採集地についての考察

平根山遺跡からは意外に多量の礫が検出された。その礫中には三浦半島基盤である凝灰岩・砂岩・泥岩・礫岩等と同質のものもある。これは遺跡附近の海岸でも、何処ででも手に入るものである。同じ礫岩や泥岩でも相当硬いものもある。礫中最も多い硬砂岩などは基盤中にない。ところが本遺跡の北、浦賀湾を距てた小原台には厚い礫層がある。五糎内外以下の小礫が多いが十糎以上の大礫も混在する。しかもこの礫層中に最も多いのは硬砂岩であり、頁岩・チャート・硅岩・石英岩もあり、閃緑岩や安山岩質のものもある（註16）。即ち本遺跡で出土した礫の大部分のものが存在するのである。小原台四周の崩壊個所で石器材料として好適なものを選んで採集することはそれほど困難なことではない。本遺跡から尾

根伝いに行っても四粁たらずで行けるところである。当時彼等が此の礫層を知っていたかどうかを疑いたくなるかも知れぬがその点は心配に及ばない。小原台は礫層上にローム層が三米から四米位積もっており、その上に有機土が一米余り覆うている。従ってこの有機土中深く埋没する遺跡は発見に極めて困難であるにもかかわらず、現在までに小原台縁辺に五個所の先史時代遺跡が発見されているのである。A地点（花立台と称す）撚糸文土器、B地点（伊勢町上方）茅山上層式土器、C地点（馬堀寄）田戸上層式、D地点（馬堀より上りつめた附近）加曽利E式土器、E地点（南側）撚糸文土器―大浦山式土器を含む―の如く縄文早期の人々が既に此処に来ているのである。恐らく石器材料としての礫採集に大きい目的を持った人達であったろう。此処に居る人達と物交して入手したとしても、聞き知って採集に出かけたとしても、容易に入手出来たわけである。即ち小原台礫層が絶好の石器材料採集地であったのである。

遺跡出土礫中には玻璃質軽石塊も数個ある。これは今も東京湾内にしばしば流れ寄る。彼等も海岸でこれを採集したものである。遺跡からは黒曜石片も出る。これは勿論物交によったものである。この黒曜石の顕微鏡下に於ける組織の比較によると何れも伊豆半島産のものの様である。伊豆半島黒曜石産出地中、神奈川県足柄上郡湯河原町広崎山が恐らく最も手近な神奈川県下への原石供給地であったと信じている。広崎山は五十米足らずの高さを持つ尾根だが、山頂から山腹、山裾にかけて極めて多量の黒曜石転石を産出している。現状では気泡の多い石器として好適でないものが多いにもかかわらず、この山をとりまく周辺地（註17）に縄文式土器遺跡が多く、山腹にも、山頂にも遺跡が存在し、先史時代人が彼等の必要材料採集のため、集まって来たことが明瞭である。これらの遺跡から検出された土器は田戸上層式・諸磯式・勝坂式・加曽利E式等で勝坂式・加曽利E式が最も多い。即ち縄文早期に既に採集地であり、中期に最も盛に採集されたものと解せられ、後期の土器を見ない（今までの資料中には）のは中期に良質のものが採集し尽されてしまったためであろうと考える。山頂遺跡には田戸上層式土器を出すが多量の石屑の存在によって此処で石鏃が多量に製造されたことが考えられる。尚当所に多量に存する黒曜石塊には極めて古い打欠きあとの残るものが多いのは当時石質検討のため一部を欠いたあとと解することが出来る。現在までには広崎山附近からは田戸上層式以前の土器を発見していないが恐らくそれ以前にも採集地であったろうと思う。平根山出土黒曜石の組織も広崎山のものに極めて似ている。

平根山出土の閃緑岩片には角礫状のものがある。小原台のは円くなった小塊であるからこれなどは物交によった入手物であろう。閃緑岩は丹沢山に原石がある。多孔質安山岩片は大きい円礫状のものの断片である。伊豆半島が原産地であるから物交によって得たものと思われる。（赤星）

（註）16　平根山遺跡出土礫及小原台礫層の礫については日本大学大角留吉氏の鑑定と指導を得た。

17　湯河原町先史時代遺跡は同町郷土研究会の諸氏が熱心に研究している。東京大学渡辺仁氏から湯河原の黒曜石産地について教えられたが、現地がつきとめられず同町の熊沢重治氏に調査を依頼し、広崎山の指示をうけた。この時縄文式土器遺跡がこの周辺にあることを知らされたので、黒曜石と遺

跡との関係に気付き調査を進め、山腹にも山頂にも遺跡のあることが知られた。尚広崎山田戸上層式遺跡附近には無文土器に大型の山形押型文土器を伴う遺跡がある。両遺跡が一つのものか別のものかまだ不明である。

四、結び

平根山遺跡はその中心部分と思われるところが切崩されて失われていたため発掘調査されたのは東端斜面の小面積に過ぎなかったが、此処には褐色土層と黒色土層からなる包含層があり、それぞれ既述の如き事実を確認することが出来た。それらを要約すると褐色土層の主体をなすものは大丸式と井草式とに比定さるべきものであり、その両者は明らかに混在であり、両者が明らかに上下の関係で埋没することはなかった。黒色土層にあっては、平坂式と大浦山式にともなう無文土器とが混在していたが、層の上半部では平坂式がより多く、下半部では大浦山例がより多く、その中間では両者相半ばする埋没状態を示した。これは既知のそれら土器の編年上に一つの明らかな事実を提示するものである。更に新しい問題として提示されることは黒土層中比較的上部出土の一片に撚糸そのものを間隔をおいて縦に三条並列させておしつけ、その隣に横に三条並列させておしつけたものがあったことで、これは既知のどの形式のものにも見られなかったものである。また鋸歯状の沈線をもつ土器は無文土器群より三戸式・田戸下層式への移行を暗示するものであった。更に重要な一つの問題は無文土器が大浦山式土器に伴出するもの（a）と平坂式土器（b）との二つに型式的にも、時間的にも、分けられるのではないかということである。

包含層からは礫が多数出土したが、これらの中には礫の一端をすって刃をつけたものとその剝片を利用して刃をつけたものがあり、これらは礫を打欠いて出来た鋭い稜をそのまま刃として使ったと認められる多くの礫器の中に混在したものである。これら多くの礫が本遺跡からあまり遠くない小原台礫層から採集されたものであろうということが認められたのは、石器原料に乏しいはずの三浦半島において意外に多くの礫が各遺跡に存在する事実への回答でなくてはならない。（赤星）